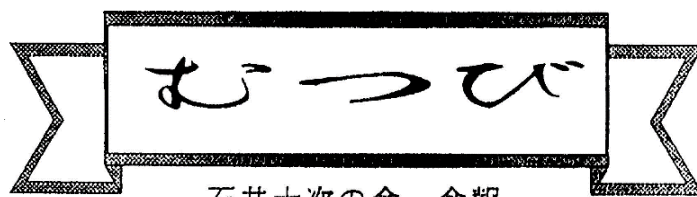


2024年
(令和6年)
4月11日



319号

石井記念友愛社と北海道家庭学校を結ぶ「福祉文化」

奈良女子大学 二井仁美

昨夏、石井記念友愛社を再訪し、「福祉文化」の継承について考える機会を賜りました。この訪問は、児嶋草次郎先生が北海道家庭学校に長期に滞在された1973年に、同校機関誌『ひとむれ』に執筆された記事が紡いだご縁です。それは、実習生でありながら同校の生産教育の中心的組織である作業班の一つを任された先生の作業班報告でした。北海道家庭学校創立百年史の準備をとおして、先生の報告書を読んだ私は、北海道家庭学校が大切にしている「暗渠精神」という理念に重ねながら、「福祉文化」とは「暗渠」の働きを記録し検証するなかで育つのではないかと、2018年の『石井十次資料館研究紀要 岡山孤児院創立130年記念号』に記させていただきました。

同稿をお読みくださった児嶋草次郎先生のお招きにより、昨年、30年ぶりの友愛社訪問が叶ったのです。「克己復礼」「身を修める」「なんじは画れり」と刻まれた木彫の看板が掲げられた門、色鮮やかな様々な花々、園長室にある北海道家庭学校の斎藤益晴先生制作の椅子と木彫作品等々に目を見張りました。児嶋先生が家庭学校での実習において注目された福祉文化が、『ゆうあい通信』とともに友愛社でより豊かに展開されていることに敬意を抱きました。

北海道家庭学校では、今年2月に『北海道家庭学校110年』を刊

行しました。同書のカバーデザインは、同校本館廊下に飾られた壁画（下図、縦 176 cm、横 544 cm）を用いています。村井武雄の指導で、1964年、同校生徒 85 人で共同制作した作品です。ブラスバンドで演奏する生徒、蝶を追う生徒、花に水をやる生徒、相撲や野球に興じる生徒、巣箱をかける生徒、木を伐る生徒、牛乳缶を運ぶ生徒、道を造る生徒、牧草を集める生徒など、当時の生活が描かれています。草次郎先生も毎日、この絵をご覧になり、またこの絵に近い世界が広がる北海道家庭学校の文化に触れながら実習生活を過ごされたことと想像します。これは、「情操的栄養」の必要を意識した留岡清男校長の下で培われた文化的土壌が生み出した作品です。すでに家庭学校では見られなくなった営みも描かれています。

友愛社再訪をとおして、「福祉文化」の継承は、時間と空間の共有とその意識的な創出、それを可能にする人と精神が礎になっていると実感いたしました。石井十次、児島虎次郎、児嶋虜一郎をはじめとして岡山孤児院や友愛社に交わりながら生きた子どもと大人、留岡幸助、留岡清男、谷昌恒をはじめとして家庭学校に交わりながら生きた子どもと大人、その一人ひとりが育てた文化が、相互の交流をとおして、よき形で継承され次代へ繋がることを願っています



「石井十次の会」都城支部長を受けるにあたって

都城支部長 福山陽子

2024年、年明け早々能登半島の地震、羽田空港の惨事、旧田中角栄氏（第64代首相）邸の全焼など、思いがけない痛々しい事故の幕開けとなりました。

普通のなんでもない日常に暮らせる事の尊さ、そして自身のこれからの生き方を改めて考えさせられた年の始めでした。

さて、私は昨年より前任の持永ナミ子氏の意志を受け継ぎ、急遽 都城支部長を務めている三股町の福山です。現在「一般財団法人ひとり親福祉連合会」の役を担っている事もあり、私達の会とひょっとしたら同じ方向性を分かち合う何かがあるかもしれないと浅はかな考えを持っている次第です。せつかくこの原稿を書く機会を頂きましたので少しご案内をさせて頂きたいと思います。

設立は昭和24年（全国組織です）現在会員は宮崎県内1500～1600名です。機関誌（県母連だよりを年2回400部）を普及啓発事業として発行しています。

県の委託事業の推進として就業支援事業であるパソコン研修、プログラム策定事業としては、母子父子家庭に個々の支援実情に応じた自立プログラム等を実施しています。また経済的な理由から支援を必要としているひとり親世帯の子供たちを応援することを目的としたプレゼント事業を令和3年度より開始しました。昨年度はランドセルを100個、図書カードを200名にプレゼントしました。この事業は県内の皆様のご寄付によるもので、たくさんの方々に関心を持っていただき、想定を超えるご寄付が集まり多くの子供たちにプレゼントを届けることができました。ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。

今回、石井十次先生とのご縁を頂きましたが、あまりにも人間業を超えた偉業です。

知れば知る程、支部長の重責をひしひしと感じ、手も足も出せずただただ茫然としているばかりの自分がある気がします。

おかげさまで副支部長、他役員の方々の若さとフットワークの良さで今年度は一つでも一步踏み出したい「石井十次の会」都城支部でありたいと話しているところでございます。

つたない私たちにご理解そしてご鞭撻の程をどうぞ宜しくお願いいたします。

編集委員長 雑感あれこれ その2

令和6年度がスタートした。編集委員一同さらに気を引き締めて任に当たりたい。原稿依頼は、内諾をいただいた方にはその都度文書で正式依頼をしている。内諾をとりつけることも編集委員の任の一つ。

そして、年間計画表がだんだんに埋まっていく。(嬉しい作業)

すべてが埋まるのは、夏季の「石井十次セミナー」終了後。セミナー講師には巻頭を飾っていただきたいからである。これまではすべて快諾をいただいている。

さて、今回はその原稿のやり取りについて記す。

原稿締め切り日は、すべて前月の15日としている。

それを受けて編集委員会は20日過ぎに開催する。締め切り日から編集委員会開催日まで約1週間。

その間に、原稿未着の状況があれば編集委員長は落ち着かない。急遽差し替えのケースがよぎる。(めったにはないが・・・)

編集委員ともなれば代理執筆のお鉢が回ってくることも覚悟はしている。

編集委員は現在6名である。

編集委員は、寄稿原稿を検討することだけが任ではない。

むつびの3頁目や4頁目を分担執筆することも任の一つ。そのことは年度当初に年間計画表に位置づけて了解している。

してはいるが、誰しも執筆は悩みの種。前号で編集委員の継続が困難度を増してきていると記したが、このことも一つの遠因であることは確かである。

編集委員会が意図的・計画的に進むことは編集委員長として望外な喜びである。どうぞ、新年度も望外な喜びを味わい続けさせて欲しい。

会員および編集委員の皆様よろしくお祈いします。※次号へ続く。



方舟館からの

お知らせ

明治末期、岡山から移築され、石井記念友愛社の敷地内に立つ方舟館。

現在は石井十次資料館の案内窓口、また、石井十次の会事務局として

使われています。

★新会員のご紹介(敬称略)

【都城市】松元 正次

★ご寄付をいただきました(敬称略)

【都城市】新森 初男 【木城町】森 さち子

「石井十次の会 総会」

令和6年5月12日(日)10時半～

4年ぶりの開催です。詳細は別紙案内をご覧ください。

たくさんのご参加をお待ちしています

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

☎ 884-0102 宮崎県児湯郡木城町大字椎木644-1

社会福祉法人 石井記念友愛社後援会

石井十次の会 TEL/FAX 0983-32-4612

メール yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp

編集後記

巻頭はサマーセミナー講師・3人目でトリを飾って二井仁美氏に玉稿をいただきました。北海道と宮崎。かけ離れた地を超えて「福祉文化」の相互交流。それが継承されることへの期待感の籠った内容が編集委員をも刺激します。ありがとうございました。

編集委員長 竹之下 悟